

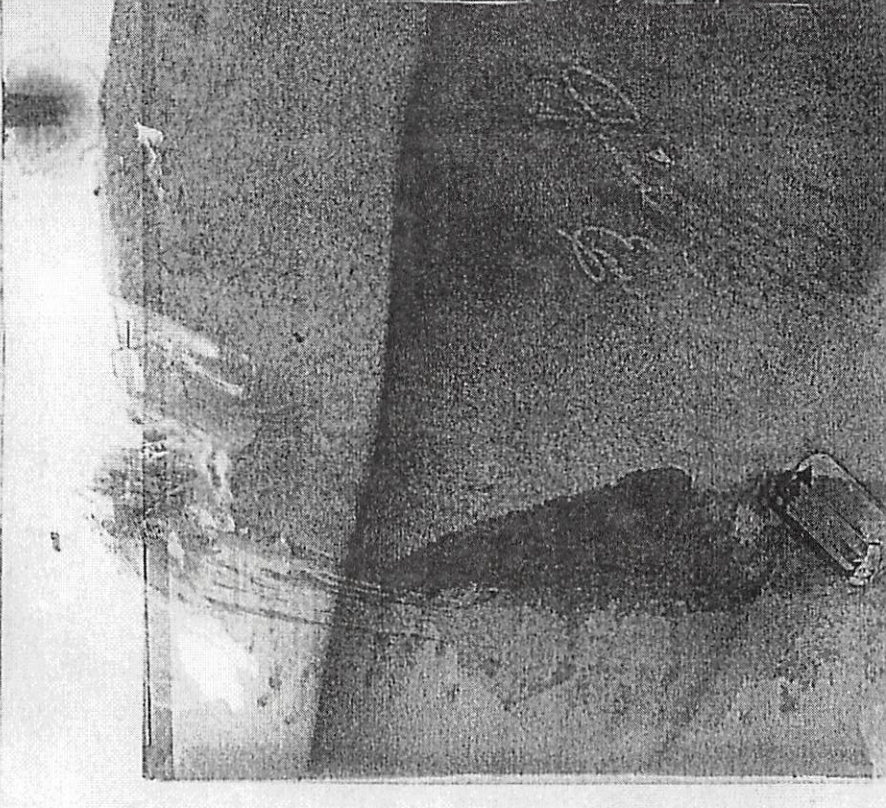
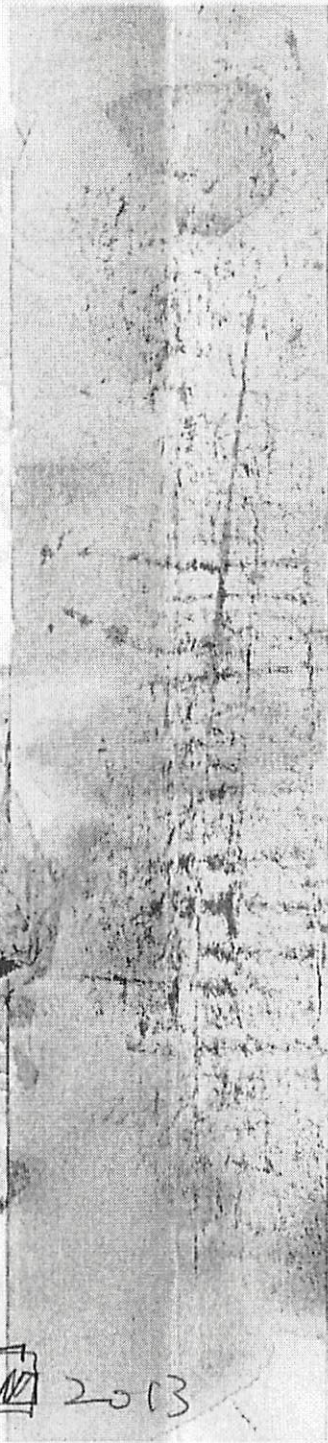
tab

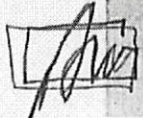
No.
39

2
0
1
3
/
08
/ 15

木村和史 / 野村 龍 / 長尾高弘
福島敦子 / 秋川久紫 / 浅野言朗
榎本櫻湖 / 倉田良成

榎 = *Machilus thunbergii*



DAS KLAGENDE LIED  2013

cont.

詩篇

野村 龍：鳥の微かな／04

福島敦子：おまえの頭 食べたるかつ！・おーいⅡ／10

長尾高弘：砂時計・語尾の研究／10

浅野言朗：Revolution/旋回／13

秋川久紫：甘い生活♪・こころの叫び♪／15

榎本櫻湖：崩壊への序曲はアリケイの城を夢見る／18

倉田良成：山菜採り・女房子（山海物語集の内）／22

文

木村和史：山を買う。／28

あとがき集／32

画：和田彰

野村龍

鳥の微かな

洋梨の翼は

練りあげられた卵白

嘴を

形作るのとは 天日に晒した水飴

左右の指が 別々に動くとき

鍵盤から 瞳は溢れ 溢れ滴り落ちる

Dvořákさんの若い血液には

Brahms氏の移り香が くつきりと刻まれ

くちづけは かるく かるく

しかし幾度も 次第に貪るように

やがて静かに それぞれの舌が 入ってくる頃

背広を脱いだ月光の懷で

鳥は微かに 数式を始める

福島敦子

おまえの頭 食べたらるかっ！

もう 1か月近く父は何も食べていない
点滴だけで生きている

なんぞ食べさせてくれ
腹減った

面会に行くたびに
言われる
つらいので病院に行きたくない

帰りたいたい帰りたいと言われるのもつらかったけれど
食べたい食べたいと言われるのもつらい

今日はついに

お前の頭 食べたろかつ！

と言われた

その迫力で

わたしの頭が父に飲み込まれていくのがわかった

お粥を食べたらあかんのか聞いとくわ かつ看護師長さんに：

と言いなから

病室を飛び出していく

わたしの首から上がない

何も考えられない

考えたくない

こんなにまでして生きなあかんの？

そつと点滴を抜いて軽くなった父を車椅子に乗せ
誰にも相談せずに
家に連れて帰って
食べられなくなったままの父を静かに眠らせてあげたい

おーいⅡ

おーい
おーい

手術室から声が聞こえる

おーい
おーい

父が叫んでいる

父は耳も目もいい

局部麻酔だから

見えるし聞こえるんだろう

何をされるのか教えてもらったけれど

すぐに忘れてしまうので不安なんだろう

おーい

おーい

誰を呼んでいるんだろう

おーい

おーい

これは：人を呼んでいるんじゃないな

おーい

おーい

自分をこの世につなぎとめるために

叫んでいるんだ きつと

おーい

おーい

1か月以上 何も食べていないなんて
信じられない

おーいっ

おーーーいっつ

この力強さは

いったいどこからくるんだろう

長尾高弘

砂時計

なんかね、

心臓に小さな穴があいて、

砂時計ってやつ？

砂が真ん中に集まって行って、

さらさら、

さらさら、

すこーしずつ落ちていく、

そんな気分がするわけよ。

突然のことさ。

不安になる原因てのは、

そりゃあいくらもあるけどさ、

そんなのはいつももあるわけ。

昨日今日の話じゃない。

最近変わったことといえば、

ちよつと忙しくなくなつて、

やりたかつたことを、

すこしやつてる、

つてことかな。

そんなことやつていていいのかな、

つてことかね。

とりあえず忙しそうにしてみようかな。

語尾の研究

憲法を改正するであるよ。

天皇様には元首になつていただくであるよ。

日本を主権国家にふさわしい国にするであるよ。

国防軍を持つということをも明記するであるよ。

軍隊である以上、命令はきつぱり守らせるであるよ。

守らない人間は死刑にだってできるようにするであるよ。

権利ばかりを主張したりせず、

義務を果たす国民になつてもらふであるよ。

政府がやろうとしていることにケチを付ける

ような言論の自由は規制するであるよ。

食えなくなつたからつて国になんとかしてもらおう、

などと考える国民はいらないであるよ。

政府の行為のために戦争が起きないようにする、

という部分は取り除くであるよ。

こういう風に変えやすくするために、

とりあえず改正のところから手を付けるであるよ。

浅野言朗

Revolution/ 旋回

へはじめての広場へは子供たちを遠ざけながら横たわっている：
中央には、投げやりな銅像、その端には、はみ出したような家屋、
溢れてなだれ込む：家を一つずつ引つ張り出しては、広場の中心
で燃やしている：炎は街の中を散歩、炎の一つ一つに口実がある

一本だけ立っている櫂の枝／縫い包みの首を吊るす／笑っている
／風を忘れている／風の音を忘れる／風の消し方を忘れている／
池を埋め忘れた／扉を閉め忘れた／笑い忘れた／忘れ方を忘れた

街の南西の外れ、ほぼ誰も近寄らない片隅には忘れられたように
へ二番目の広場へが横たわる：たまには虐殺の舞台であったから
：赤い皿と白い皿が交互に重ねられる：表層は絞め殺されている

：そこで、封印し損ねて希釈された笑い声が、時々漏れ聞こえる
降り止むことのない雪掻き／そろそろ雪を止めたい／笑ってる／
風を千切りにする／それぞれ袋に入れる／風船に吊るして飛ばす
／校舎の屋上に風の墓を立てる／風の数え方を壊す／風は萎れる
街に到着するはずの夜行バスは、どこに停車しているのだろうか：
へ三つ目の広場への停留所は見付からない：運転手は旋回する：
人の影に靡かないように：対流している人の影は、落葉のように
舞っている：拾った子供を、木の枝に吊るす：子供は鳴いている

秋川久紫

甘い生活♪ (1974年)

貴女と語らう 霖雨の夜は

苦く空ろに 過ぎゆく

蒼きグラスに 放恣の兆しを

注ぐ日は 何処へと

心乱れ 熱を帯びて

虚妄だけが 翔けてゆく

今では灯り消えて 重なる影も冷たい

拙き愛の処方 一コマの甘いエチュードよ

気怠い朝には 貴女と睦んで

カフェを 二層に淹れたよ

馴染みの舞台で タンゴを踊った

南風の日は 幻か

壁に書いた ヴアレリーの詩は

誰の願い なぞるもの

今では不埒な目で か細い月を眺めて

素肌を晒している 一幕の淡いイリュージョン

今では心すさび 慈しむこともできない

拙き愛の処方 束の間の甘い生活よ

〔原詞…山上路夫〕

〔作曲…筒美京平〕

こころの叫び ♪ (1974年)

悪辣だと識って 花が爆ぜる

この市場は玩具のよう

何もかもが朽ちて 風に溶ける

滅びに向け奔れという
何故 光がたわむのか
何故 翳りが果てぬのか
深海の底で眠るまで
この夢と踊りたい

枳の棘を 信じたまま
煉獄の丘転がりゆく
熱き空を蹴って 碎きながら
雨に打たれ獣となり
あの 流離う夕闇や
あの 不穏な満月と
森蔽の涯てに触れるまで
しどけなく踊りたい

〔原詞…阿久 悠〕

〔作曲…筒美京平〕

壊滅への序曲はアリクイの城を夢見る

採光性ではないトウモロコシの塚を破つて

はしたないお辞儀は進んでいく、側溝を聞えながら

午前四時、飴の嗅覚に身悶えする腰骨

の饒舌な錯視にみどりいろの翅がうつろ

こたえようとひらく甲羅

棘は魚礁に疎まれることをむしろ

萎びた給水塔に隠遁するだろう

接着剤すら疼痛の要塞を潜りぬけることはできず

鰓を疊みながら金箔をよりそわせて屯している

額づく登に薄衣を汚し

山塊の蛇口から

虹のクジラがあさましく蝦を

盗む

屈折する輪郭をとらえる四肢は靡いた餅を鹿の角に侍らせて、自瀆への疑念に可塑性の真珠を匂いやかに響きわたらせた溪谷に根づく文明だと証そう、空砲が茶器の内側から煙のたなびくさまを做つて悉く蚯蚓を苛む、ある北方に短刀の舞うのを見遣り、蛮族の髭に櫛を挿す蝶番を欠いた部屋、煉瓦に耳を認めて囁きはじめる睦言に鉤爪をたてた片翼のオレンジは雑然と牛車を媚びて待つ、

祝祭に葡萄畑を断たれた

巖の、灰白く雪稜に甘んじる乳母車

襟はなく椅子の絶命に帯を馴染ませてから発ち、

姻族等の縫われた時刻を彩る櫓

あしざまに拾うもの、

籠絡する癒合に多く訝しむ村の、一昨日の鐘に惑わされ

稚い信号機にちぎれた雲をあたえ、

青銅の地図

に記された尿意を宥めた春

釉薬へつたえられる

なくした頭蓋へのはげしい恋慕

巫女を撓めて、

芽キャベツを封じる

牧童の携えた磁石とマリオネットが

橋のうえで

鯨を演じている

案山子の涼む日向にころがる無数の蟻の首を嘗め、灼かれた舌先を痰壺に浸す
植物性の黙禮をささげて歩く樹海につづく火口、いまでも鉛中毒に苦しむ過去
を拐し、机のなりたちを塗るかためた蜜蜂の針に通す鏡は凍えた雨傘を抱えて
露地を彷徨うナナカマド、旅の終わりはクラリネットに阻まれて味気ない虫た

ちが体液を揃えて髪を結わせ、簪の唇をしずかに辿る山鳩の啜りなきを吞む、

追うものは笈を重ねて、

ちいさな空き壘は空を責める

壁の鈴なりに息を奪われ寝る書物の蔭に、

そよかぜが障子紙を叩いて嗚咽を堪えた笹の繁み、

糊を纏い、ガラスに遊び、

砂の餌をまろく

食紅の撒かれた庭に蓮の太腿が写る、

典雅で骨を齧る風俗の

苳られた

焼却炉

倉田良成

山菜採り

山海物語集の内

村の鍵取りの家の裏に回ると小さな鳥居があつて、そこをくぐればすぐに山がはじまる。山に入るのに特別な作法といったものはないけれど、山や谷に宿るモノに対しては、つねに意識を置いておくほうがよいとされている。道の裏からすぐにはじまっている山は高くはない。しかし意外に深い。樹木相は、タブノキやブナなどの照葉樹が主で、そこにクスノキ、クルミがうち交じり、スギやヒノキ、クロマツ、アカマツ等の針葉樹は、或る程度までの高度をかせがなければ出現するに至らない。村のものが山に入るのは、春や秋の好天の日にかぎられる。低くても、変わりやすい山の天気にはよほどの注意を要するのだ。うらうらと晴れていたとしても、雲がかかればたちまちに雨が来て、躰を冷やす。迷路のような沢の道筋を霧やガスが隠し、斜面から転がり落ちれば手足を痛めて動けなくする。そうまでして人が山に入るのは、そこに宝があるからだ。食べられる植物ばかりでなく、薬草や鉱石、金、罨で捕らえる鳥獣のたぐい、

ヤナにかかる沢の魚など、そこにはちつともカネなど要らねえんだ、と村のものがいちように口にするのは、けっして彼らの吝嗇のさがを示すものではない。宝の山とよく言うが、山こそ宝なのである。山のものを取り尽くさないという心得は近ごろのことであつて、そのかみは、山は恐ろしい深さを有する近づきがたさと、無尽蔵さを隠し持つ存在でもあつたのである。さて、斜面を転がり落ちて氣を失つたものは、そのまま絶命するのではないとすれば、また意識を取り戻す。そうして助けが来るのをあてもなく待たなくてはならない。その場を離れて動き回るのはやめたほうがよい。手負いのものであれば、痛めたところをいつそう深刻に傷つけてしまふだろうし、いったん氣を失つたのであれば、ますます深く山の迷路に踏み入つてしまふだろう。こうしたとき、その場で夜明かしをすることまで覚悟しなくてはならない。寒さが厳しくなければ、そうしたほうが賢明だ。山に迷つた村人は、樹間を見上げてそこに皎々と、憤怒のようにかがやく冷たい月明に直面するだろう。それが夏の短夜であれば、はるか頭上にテッペンカケタカというほのかな声を聞くだろう。寝入りばなにはふいに繁みの向うを、金欄に似た衣裳をかついた上半身だけの姫御前むすめが、見えないう馬によこざまに乗つてきらきらと過ぎるのを見て、恐怖の叫びをあげるのを

堪^堪えるだろう。やがて朝、ほほーい、ほほい、という山尋ねのおらびが麓のほうから上がってくる。村の衆が呼んでいるのは、迷った村人の肉身とともに、村人の魂そのものでもあるのだ。村の衆の目の前から消えた、迷える村人の存在の半分はこの世のものでない。この世のものであるあとの半分に水を飲ませ、焼酎を噴きかけ、熱い粥を与えて気をつけさせる。こうして村人のぜんぶがこの世に戻ってくるのだが、村のすべてのものは死んだとき、見えない姿で鳥居をくぐり、またあの裏の山に帰ってゆくのである。ふと、腰に提げていた手籠に目をやれば、ワラビ、ゼンマイ、コゴミ、キクラゲなどがそのまま、あふれんばかりに折り重なって香っている。鍵取りの家に少し分けてやるほかは、だけどちつとも金なんか要らねえんだ。

君が行日長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ

磐姫皇后

女房子

山海物語集の内

盆が近づくとあいつらは帰ってくるんだと叔父貴が言う。さいしょ、それははるかな遠吠えみたい近づいてくる。灯心がじりじり言うようなかそけさで。仏壇に燈明をあげ、玄関に高張提灯の火をともし、おれはあいつらを待つているんだ、とも叔父貴は言う。でもどんな高貴な火をともしても、どんなにありがたい御念誦をもつてしても、あいつらは鎮まらない。ミアカシの火が尽き、御念誦の聲がしわがれてくると、あいつらは家の前の辻に庭火のように厩大に聚まつてきて、おれたち、生きているものに向かつて声なき念の濁みかたを送る。丑の刻を過ぎるころ、あいつらのそれぞれの魂魄が蝟集し凝つて象かたとなり、おれたちの愛する死んだ女房子の姿をとつて薄闇ごしにあらわれる。あの、不慮の大惨事で亡くしたいとしいものたちの姿で。だが、悲しいかな、あいつらはすでに莫迦になつて戻ってくるんだ。濡れ縁の前庭にあいつらは立ち尽くすのだが、俺たちに向いて言う言葉にはもう意味が無く、その意図がくみ取れない。あいつらは、大きく口をあけ、だらりと長すぎる舌を伸ばして白目をむき、あ

わあわと、あるいは、おうおうと、涎にまみれた声なき声を上げるばかりなのだ。あの、長くないしい髪はさんばらにそそけだち、ところどころ脱けて禿げ、眼窩は落ちくぼんで、けがらわしい死者の様相さえ見せている。ここではないかなる呪も符も効きはしないのだ。ただ、おれたちの目の前で、なにごとかを訴えかけるようにひたすら沸騰する唾と眩きを発し、歎くように、または嗤うように、歌うようにして、深い闇のなかで溶け崩れてゆく、かのいとしいものら。これらをまざまざと目に灼きつけることが真の鎮魂といえるのか。明け方近く、さいごの夜の更に到り、けたけたと大悪笑のひびきをあげてあいつらは去ってゆく。幽明を異にする、ということの本当の意味はこんなところにあるのだと、おれは叔父貴に教わったのだ。そういうえば、叔父貴の古い友達でタクシー運転手がいる。その一つ話に、あるそう遅くもない夜に、二、三人連れの客を乗せたのだが、彼らが指定した目的地は曲がりくねった道をのぼってゆく断崖の上の波打ちぎわである。目的地に近づくにつれ、後部座席でしきりにひそひそと喋りあっている声が高まり、あるいは水を打ったようにうち沈む。やがてヒルトップとも言ふべき丘に着いて、お客さんいくらくらです、とふと後ろを振り向くと、ついさつきまで喋っていた誰も彼も、人っ子ひとりいない。叔父貴

の友達は言うのだ。ここが大津波がさいごに襲って、大勢の人間が浚われて
いった現場だったのだと。叔父貴から教わったから言うのではないが、幽明が
相接する場所というものもまた、たしかに存在するのだろう。

マツチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや 寺山修司

*詩集『詩、耳袋 —山海物語集の内—』より。

木村和史

山を買う。

数年前に山を買った。山を買うなど、夢のまた夢だった。1万坪ほどの天然林の山が、国道をはさんだ反対側に売りに出されているのを知って、気持が動いた。車で5分とかかからない。山があるといいなと思ったのは、薪ストーブ用の薪が確保できるからだ。毎年、どこから20万ほどの薪を購入しないといけないとしたら、200万の山を買ってしまえば10年で元がとれる計算になる。うまく管理して木を育てれば薪が尽きることはない。それに、薪材としての価値以上に、天然林とこののがなによりも魅力だ。

という夢と理屈を、さて、お金を出す女房にどう切り出したものか。やみくもに夢に走るわけではなく、夢にちゃんと計算を組み込んであるつもりだが、説得力というのは理屈

の強さと必ずしも比例しない。普段の信用力がおおいに関係する。

「おとうさんがまた、変なこと考えてる」おそらく、そんな反応になるのではないだろうか。しかし、善は急がないといけない。

とにかく見るだけ見てみよう、というところまで女房を納得させ、分譲会社に電話を入れた。分譲会社の社長は、亡くなった義父と仕事上の長い付き合いがあつて、義弟とも親しい間柄だ。山を案内してくれることになつて、東京から女房も駆けつけた。

「おとうさんには本当にお世話になつたんです」と社長が女房に言う。言葉どおりの気持が伝わってくる。

霧雨の日で、山はすでに緑一色に埋まつている。起伏が多く、広大とはいえないけれど

も、車が入れる道があつて、ナラ、白樺、カエデなどが目につく。山桜もある。ブドウの大きな蔓、コクワの蔓が雑木にからんでいる。かつては伐採もしていたらしく、30年か40年ほどの中径木が多い。腐れかけた巨大な切り株もいくつかあつて、昔の鬱蒼とした原始林が目にと迫ってくるようだ。

「樹木辞典を買つて、木の名前を調べたりすると面白いですよ」と社長が言う。

「ほんとに、そうですよね」

わたしの目が輝いたと思う。薪のことも、女房の顔を窺うことも忘れて、ひたすら天然林の魅力に引き込まれる。木々に挟まれた道を抜けると、牧草地が明るく広がっている。

「すばらしいだろう」戻ってから、あらためて女房の説得にかかる。

「いいけどねえ。でも、本当に必要なの？」必要かと訊かれると、言葉につまる。

「山があると、ものすごく便利だよ。無尽蔵の宝だよ」

「おとうさんの夢なんでしょ？」

「でもあるけど」山を持っていても放置したままの人はいっぱいいる。でも、わたしなら隅から隅まで役にたてる自信がある。

「歳とつたら誰が薪を伐るの？」

「伐つて運んでくれる人は幾らでも見つかるよ」自分で伐れなくなるときのことなど考えていない。

「しょうがないねえ」うらめしそうにわたしを見る。

都会で、なんでもお金で買わないといけないような生活をしていて、それであなたは満足なの？ 畑を耕したり、魚を釣ったり、山菜を採ったりして、少しのお金でも生きていける生活を夢見ることはないの？ こっちは、いろんなものがただで手に入るんだよ。

都会の骨董店で売つてるようなものをくれる人だっているよ。工夫して暮らしを作っていくのはほんと楽しいんだぞ、というような吹きを胸の中でする。つまり、ここ数年のあいだにわたし自身の気持に生じた変化を振り返るとそういうことになる。

やや強引に事を進めたかも知れないが、夢の山が手に入ることになった。社長が測量会社に頼んで、境界の杭を立ててくれた。測量に来た人の説明では、道路もわたしのものなのだそうだが、国道から入ってしばらくは他人の敷地だし、奥の牧草地で作業する人もわたしの道路を通らないといけない。測量の杭も、数メートルくらいの誤差は許容範囲らしい。牧草地がわたしの区画に何百坪も食い込んでいる。そのことを牧草地の人が気にしているというので、今までどおり自由に使ってください、と伝えてもらった。隣りの家との境界に目くらたてるような感覚ではやっていけない世界なのだと思う。

そうではあるが、道ばたに生えているスミレやあざみの花も、わたしの庭の花に見えて、なんだか嬉しくなる。大型機械に踏みつぶされるとかわいそうなので、手当たり次第に掘って畑に移植してあげたが、勢いがなくなったり枯れてしまったりした。山の花は山に咲かせておくのが一番のようだ。

家づくりが忙しくて山の手入れはまだできないが、木や花をただ眺めるためにふらっと山に入るのが楽しみになった。春にはウドやアイヌネギなどが採れる。

2年ほど経ってなんとなく、誰かが入り込んで山菜を採ったりしているのではないかと感じるようになった。タラの木があるが、とれ頃になると芽がきれいに収穫されている。ぶどうの大きな蔓があつて、それが巻きついていた細い木が鋸で伐られている。最近になって近所の人から聞いた話では、わたしの山のあたりは山菜がよくとれ、鹿の住処にもなつていて、山菜採りだけじゃなく、鹿猟に入る人もいるのだそうだ。ひとり満足げに山を眺めていたあいだに、ほかの人の影が自由に動いていたことになる。

山や野は、わたしの子供のころは誰のものでもない感じだった。裏山や、林道に入つて大量の山菜を採り、山ぶどうやクルミの実を収穫して帰った。雪解けのあと、裏の耕作前の広い畑で、山わさびを採るのも楽しみのひ

とつだった。所有者に咎められた記憶は一度もない。自然のなかの、自然の恵みたち。誰でも自由にその恵みを受けることができて、しかも、取り尽くせないほどの恵みがあった。誰のものでもない習慣が、みんなの気持にもわたしの気持にもまだ残っている。

山の登記が完了し、土地だけでなく山に生えている草木も自分のものになる。庭の草花ではない、野生の混沌そのものを、書類上、所有したことになる。かつてのわたしの持ち物といえば、手元にあつて鍵をかけたなり、ドアを閉めたりして管理できるものがほとんどすべてだった。わたしの携帯とかわたしのパソコンとか。誰でも自由に出入りできる山を私有する感覚は、今までとあきらかに違つて手に余る感じがする。狭い心のまま、広い世界と向き合っているようだ。

3年目の春、畑に入れる土を山で軽トラに積み込んでいると、乗用車がやってきた。ふたりの男性が乗っている。「山菜採りですか？」と訊くと、頷いたので、「私有地なの

で」と言いかけてちよつとためらい、「あんまり、採らないでくださいね」と優しく告げた。薪を伐るだけの山なら、山菜などは自由に採つてもらつてかまわないのだが、野草の庭をつくろうと夢見たり、山ぶどうの実がたわわになるのを楽しみにしているときに、誰かに踏み荒らされたり、先に収穫されたりするのはどうも面白くない。それで、迷つた末に、看板を立てることにした。自然管理林・採集禁止。

山の名義はわたしの（女房の）ものになつたけれども、草木の一本一本まで私有することなど実際には不可能だ。人が踏み荒らさなくても鹿が自由に歩き回る。野草たちはわたしに守られてきれいに咲くのではなく、自然の力で生き死にするときに一番美しく咲く。看板を立ててはみたが、自然も人も管理しない生き方をどこかで学ぶ必要があるようだ。そのうち多分、山が教えてくれるような気がしているのだが。

confidence

曲がった土台で苦勞している。阿寒の渡辺さんにもらった古材を何とか生かして使おうと思っているのだが、うまくいくかどうか。とにかく、考え考えゆつくり進むことにする。冬までには屋根、壁を終了させないといけない。楽しみでもある。(木村)

肺炎が治つて胃ろうをつくる手術が終わると、何もなかったような穏やかな日々がやってきます。空腹感もなくなる。お風呂にも入れる。テレビも見える。花の香りも感じられる。延命つて簡単にできてしまうんですね。もしかしたら静かに旅立つことができたかもしれない大切なチャンスを失つて…。それでも、父が微笑むと今を生きていると思う…この医療の魔力に抗うには家族と何よりも本人の強い死生観が必要だと思えます。(福島)

5年前に買ったコンデジが壊れたので、新しいものを購入。24倍ズームというのがついていて、木の上の蟬をまるで目の前にいるものように撮れて楽しい。(長尾)

昨日、初めて井上陽水のコンサートを聴きに渋谷のNHKホールに行つて来た。ハリのある声と華のあるステージは、やはり一流らしさを感じさせるものであった。来月は昨年に引き続き、矢野顯子トリオを聴きにブルーノート東京に行く予定。「生きていること」自体が、ある意味で奇蹟なのだから、生の果実を味わう僥倖を逃さないようにしなければ。前号に続き、今回の作品も昭和歌謡シリーズ。歌手が同じなのは意識したが、発表年と作曲者が同じなのは偶然だ。(秋川)

【承前】急転直下、私の柵は碎け散った！私はまた、武蔵野のアパルトマンで、独り静かに暮らすこととなりました。これからもどうかよろしくお願い致します。（野村）

古めかしい隣家が、建て替えを始めた。生まれた時からそこにあった建物の解体はこの上なく丁寧で、釘の一本一本まで数えられるくらいだった。やがて、基礎に至るまで丁寧に解体された敷地は、惚けたように空っぽになった。今は、新しくできる家の輪郭をなぞった地縄が、夏のからつとした日射しの下で、白く揺れている。幼い頃の記憶まで解体されてしまったような、この何もない白々しい空地が余白のままであることを、秘かに願っている。（浅野）

七月の終わり、倉田編集長とその奥さまの三人で談笑する機会を得た。わたしとし

てはかなりの遠出であったが、夏のまとわりつくような空気はかえって爽快だし、何本もの線路が並び、すべて通りぬけるにはいくつかの踏切を渡らなければならぬというような経験は貴重だった。工業地帯に沿った土地柄か、煙突がみえたりビール工場がみえたり、そのくせ小さな商店街がいりくんでいるのはどこも変わらない。思わず「ED」に参加させていただくことになったのはなによりもの収穫だ。（榎本）

いまわのキワ、というのはまだ生きているのだろうか、もう死んでいるのだろうか。DAS KLÄGENDE LIED は、G・マーラー作曲カンタータ『嘆きの歌』。（和田）

地方で、火急の事態を告ぐ事件が次々生じている。田舎で余生を送るのは夢にすぎなくなつた。深刻なことである。（倉田）

120 第39号 / 2013年8月15日

編集発行人 / 倉田良成

〒230・0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール / kateis11@k3dion.ne.jp